

二〇二二年度 札幌大谷大学社会学部地域社会学科

一般選抜Ⅰ期

国語

注意事項

- 1 試験開始の指示があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
- 2 問題冊子は7ページあります。
- 3 試験中に印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて試験監督者に知らせてください。

□ 次の文章は伊藤亜紗「思い通りにいかないことに耳を澄ます」(『ポストコロナの生命哲学』集英社新書、二〇二二年)の一部である。本文を読んで、後の問いに答えなさい(設問の都合で原文の一部を省略改変した)。

体が接触する機会が非常に多いものの一つが、目が見えない人の①カイジョです。私自身、研究を通して目が見えない人と関わる機会が増えたことで、「こんな触覚の世界があつたんだ」と、自分の触覚が新たに開発されたようなところがあります。そのことを一番感じたのは、視覚障害者向けのランニングサークルに参加させていただいたときのことでした。

通常、目が見えない人の動きをカイジョするときは、肩に手を乗せたり、②肘を持つたりするのですが、ランニングでは見える人が伴走者としてペアになり、輪になったロープの両端を互いに持ち、二人の手をシンクロさせながら走るのが基本です。私の場合、見えない方の伴走者として走ることもとても楽しかったのですが、^A驚いたのは、自分がアイマスクをつけて見える人に伴走してもらった経験でした。

「視覚障害者の方はこの方法で長い距離を走っているのだから、自分も伴走者を信頼してやってみよう」と、自分の中の恐怖を吹っ切ったところ、経験したことのない快感を味わいました。それは、一言で言えば、人を信頼することから生まれた快感なのだと思います。私は、今まで家族や同僚を信頼していたつもりでしたが、実は、信頼にはもつとすごい深みがあつたのです。そこに行くことができたという感覚は本当に新鮮で、素晴らしいものでした。

目が見える私は、普通の生活の中ではそれこそ人と距離を取り、自分で自分のことをやるのがいいことだ、と思つて生きてきました。自力でできることをやるのはよいことかもしれませんが、それは裏を返せば人を信じていないということを意味します。アイマスクをして伴走者と走るという経験をしたこと、一〇〇パーセント自分の身を人に預けるということをいかに自分がやっていなかったかということに気づかされました。

相手を信じて自分を解放すると、接触面を通して、相手の感情や意思がちゃんと伝わってくるという点も、「ふれる」ことのおもしろさであり、価値なのだ感じます。視覚障害者と伴走者のランニングでは、ロープを通じて相手の振動や感情といったものがかなり伝わってきます。ロープを介してだの間接的な接触なのですが、だからこそあそびが生まれて、情報をキャッチしやすいようです。たとえば、目の前に急な坂があるとき、目が見える伴走者が「ちょっと嫌だな」とためらう気持ちが目が見えないランナーに伝わって、「坂ですよ」と伴走者が伝える前からそのことがもう分かっていたりするので。慣れた方は、「いいランのときは、お互い^Bキョウメイするような感じがある」と言います。

自分をガードしているうちは、緊張して相手とのあいだに壁をつくろうとしていているわけですから、自分のことも伝わらないし相手のことも分からない。けれども、相手を信頼して解放した瞬間に、驚くほどたくさんさんの情報が相手から入ってきます。自分を相手に預けてこそ相手のことが分かる、というのが触覚的な人間関係のおもしろさです。相手を信頼し、自分を預ければ預けるほど、相手の情報が入ってくるのです。

「信頼」と似ていると思われている言葉に「安心」があります。けれども、実は「信頼」と「安心」の意味するところは逆だと言われています。「安

心」が、相手がどういう行動を取るかは分からないので、その不確定要素を限りなく減らしていくものだとすると、相手がどういう行動を取るか分からないけれど大丈夫だろうというほうに賭けるのが「信頼」です。

私がアイマスクをつけて走ったときの経験に喩えようと、そのとき伴走してくれた方は初対面でしたから、どういう人なのかよく分からないまま、一緒に走るようになりました。ある意味、「Ⅰ」「Ⅱ」できない状況であつたとも言えますが、私は「伴走のことをよく知っている方なのだから大丈夫だろう」と信じるほうに賭けたわけです。それが人に身を預けるといふことだと思えますし、「Ⅰ」「Ⅱ」にあつて「Ⅲ」「Ⅳ」にないのは、まさにこの「身を預ける感」だと思います。

(中略)

直接体にふれなくとも、私たちは今「人に会う」という意味での接触の機会を大幅に奪われた世界に生きています。私が一番恐れているのは、接触の機会が減ることによって、人々が「Ⅰ」「Ⅱ」できないだ」という一般論でものを語るようになることです。接触しないと相手の具体的な状況が分からなくなりやすから、共感も難しくなるのです。自粛警察は、まさにその象徴でした。みんな一人ひとりおかれた状況が違って、できることやできないこと、優先すべきことやそうでないことが違うのに、「Ⅰ」「Ⅱ」できないだ」という言説は、この違いを「シャショウ」してしまっています。

私は、今こそ「道徳」と「倫理」を区別することが重要だと考えています。この二つは似た言葉に思えるかもしれませんが、実はまったく違う。ペクトルを持った言葉です。

まず道徳とは、「人を殺してはいけない」のように、状況によらない、普遍的な命令です。まさに小学校の道徳で習うような内容で、そこには迷いはありません。

一方倫理とは、さまざまな制限のある具体的な状況下で、最善の行動を選ぶことです。絶対的な命令に従うことが必ずしも正解とは思えないときに、何がベストなのか、探し求めることです。そこには「あれでよかったんだろうか」というじりじりした迷いがつきまとうし、その場で解をつくり出すという意味で創造的な行為です。

SNSの発達によって、私たちは普通の人の普通の生活の様子を、何となく知ることができるようになっています。けれどもSNSに流れてくるのは断片的な情報であり、その人の生きていく具体的な現実のすべてではありません。にもかかわらず、なまじ断片が流れてくるので、それが「Ⅰ」○すべきだ」という道徳的態度を誘発しているようにも思います。

重要なのは、「Ⅰ」○すべきだ」と一般論を振りかざすことではなく、「この状況で何ができるだろう」「相手はどのような状況にあるのだろう」と探る倫理的な態度です。それには時間がかかります。忙しい日々のくらしの中で、いかにこの時間が確保できるかが重要であるように思います。そこには、労働や福祉などさまざまな問題が関わってきます。

倫理的な態度の第一歩は「聞く」ことだと思えます。

たとえば、障害を持った人と関わるにしても、「困っている人がいたら助けよう」と道徳的な態度で接してしまうと、相手について決めつけること

になってしまいます。よく、障害を持った人は「障害者を演じさせられている」と口にしますが、善意の押し付けになってしまふのです。

でも、相手に「聞く」ことから始めてみると、全然違う人間関係が生まれます。単純に、手を貸す前に「困っていることはないですか」と聞くことは重要ですし、言葉以外のところにもいろいろな情報があるはずでです。この人は急いでいるのか、それとも時間がかかっても一人で道を歩きたがっているのか。慎重な人なのか、大胆なのか。そういった、振る舞いの^⑤端々から聞こえてくる「その人の状況」に耳を傾けることが重要です。

耳を傾けることによって、私たちは自分の思い込みから自由になり、想定していなかった関わりの可能性が見えてきます。最初は手を貸すつもりだったのに、結局自分が話を聞いてもらった、とか、意外にも共通の趣味が見つかってその後も連絡を取り合うようになった、とか、倫理的な態度をとることは、偶然の要素に自分を開き、そうすることによって相手の可能性を引き出すことに通じます。

コロナ禍でソーシャルディスタンスが推奨され、場を共有することの難しさが言われますが、「聞く」ことはむしろ共有しているものがない、つまり互いの場が違うからこそ生まれる行動と言えます。ですから、必ずしも相手と場を共有していなくてもいいわけです、むしろ場があるからこそ消えてしまうものを救おうとしていると言えます。場は、どうしても人に場の空気に則った演技的振る舞いを強制してしまいがちです。そうした演技がない中で、それぞれの状況や状態、思っていることを確認していく、それがすなわち「聞く」ということだと感じます。そうすることによって倫理的創造性を解放し、道德の^⑥杓子^{しやくし}定規な命令に押しつぶされないようにすること、それが私たちが社会の中に居場所を持つということなのではないかと思えます。

問一 傍線部①～⑤の漢字はひらがなに、カタカナは漢字に直して記しなさい。

問二 傍線部 a 「ベクトル」、傍線部 b 「なまじ」、傍線部 c 「杓子定規」の意味を記しなさい。

問三 傍線部 A 「驚いたのは、自分がアイマスクをつけて見える人に伴走してもらう経験でした」とあるが、この「経験」によって筆者が気づいたことは何か。本文中の言葉を用いて2点記しなさい。

問四 【一】【く】【目】には「安心」か「信頼」のどちらかが入る。それぞれに最適な言葉を記しなさい。

問五 傍線部 B 「○○すべきだ」という一般論でものを語る」と反対の内容となっている43字の箇所を本文中から抜き出し、その最初と最後の5字を記しなさい（句読点等も字数に含む）。

問六 傍線部 C 「倫理的な態度の第一歩は「聞く」ことだと思います」とあるが、筆者は「聞く」ことをどのようなものとして捉えているか。100字以内で説明しなさい。

㊦ 次の文章は鷺田清一「哲学の入口」(『哲学の使い方』岩波新書、二〇一四年)の一部である。本文を読んで、後の問いに答えなさい(設問の都合で原文の一部を省略改変した)。

わたしたちの時間へのかかわりは、とにかく不安定だ。勤務に貼りついてるときは精密に区分けされた時間に居心地をわくくし、暇なときは時間をもてあまし、何かに夢中になつてるときは時の速さが恨めしくなり、何かを待っているときは時の①ドンジュウき、粘つきにいらいらしてくる。とおもえば、たとえば震災のような一大事が起こると、激しく波打つ社会の時間にあつまり呑み込まれもする。そして、それほどじぶんを②震撼させたものが時とともにあまりにも速やかに褪せゆくことに愕然としもする。時間はあらゆるものを洗い流してゆく。

希望、不安、祈り。プロジェクト、年度計画、気象予報、企業戦略、リスク予測、競争、そして流行りもの。だれもかれもが時間を、前のめりというか、つんのめって感受しているのかとおもいきや、逆に過ぎゆくものへのこだわりもはなはだしい。悔いても悔いても悔やみきれないこと、消せない記憶、深い心的外傷、それにいまだこそ薄まったとはいえ一国の伝統、家系への③頑ななこだわりも。ことほどさように、ひとは時間に④翻弄されてきた。

そういう翻弄がついにここまでできたかと感じ入ったのは、阪神淡路大震災の翌年のこと。(注1)村上龍の小説『ラブ&ポップ』(一九九六年)を読んだときである。胸の詰まる描写なので、すこし長くなるが引用させていただく。どうしてもほしい指輪を買うために「援助交際しかない」と心に決めるシーンである。

大切だと思つたことが、寝て起きてテレビを見てラジオを聞いて雑誌をめくって誰かと話をしていううちに本当に簡単に消えてしまう。去年の夏、『アンネの日記』のドキュメンタリーをNHKの衛星放送で見て、恐くて、でも感動して、泣いた。次の日の午前中、「バイト」のため『JJ』を見ていたら、A心が既にツルンとしていての自分に自分で気付いた。『アンネの日記』のドキュメンタリーを見終わって、ベッドに入るまでは、いつかオランダに行つてみようとか、だから女の子の生理のことを昔の人はアンネっていうのか、とか、自由に外を歩けるって本当は大変なことなんだ、とかいろいろ考えて心がグシャグシャだった。それが翌日には完全に平穩になって、シャンプーできれいに洗い流したみたいに、心がツルンとして、「あの時は何かおかしかったんだ」と自分の中で「何かが、済んだ」ような感じになってしまっているのが、不思議で、イヤだった。今日中に買わないと、明日には必ず、驚きや感動を忘れてしまう。きのうはわたし、ちよつと異常だったな、で済まして、買ったばかりの水着を裏際につけて脱毛の範囲を確認したりしている自分のはつきりと想像できた。インペリアル・トパーズは十二万八千円だ。

大切だと感じたものはすぐに手に入れるか経験するかしないと、一晚か二晩で平凡なものに変質してしまう。みんなそのことをよく知っている。ブラダのチェーンバッグを買うためにマクドナルドで半年バイトする女子高生はいない。

こうした描写を重ねながら、村上は、人びとの欲望の立ち上がり方に静かだが大きな変容が生まれていることを浮かび上がらせていた。欲望のこうした変容は、村上の描いているように、時間感覚の変容をともしなう。^B時を未来から現在へと流れ来るものとしてではなく、現在から過去へと流れ去るものとして受けとめる感覚である。いまこんなに欲しくてたまらない指輪も、明日になればもう欲しくなくなっているかもしれない……。

「右肩上がり」の時代はそうではなかった。高度成長期以降、産業をはじめ人びとの行動様式は時を先駆するものとしてあった。プロジェクト(project)の立ち上げに先だって、利益(profit)のあるなしの見込み(prospect)の読み、事業の計画(program)、生産(production)工程、販売促進(promotion)、そして約束手形(promissory note)による支払い、事業の進展(progress)の確認とその後のスタッフの昇進(promotion)というぐあいには、生産から営業まで、プロスペクティブ(prospective)とでもいべき前傾姿勢で事にあたってきた。「先に」とか「予め」「前もって」を意味する接頭辞 pro-のつく行動の、見事なまでのオンパレードである。先にトレンドを読み、先に事業を起こした者の勝ち、というわけだ。

川上から流れてくるものをいちちはやく掴むこと。これは橋の上に立って川の流れ(Ⅱ時)を水が流れ来る方向に向かって眺めるといふスタンスだ。ある事業を興し、やり遂げるときのそのプロスペクティブな心性は、しかし事業にかぎったことではなくて、わたしたちがある予定や計画を立てて、それを目標にいくつかの行為を一つひとつ着実に積み重ねてゆくというような生き方を支えるものである。ところがこれとは反対に、『ラブ&ポップ』の女子高校生は、いわば逆方向を見ている。橋の上に立っても足下の水が川下へと流れ去り、やがて消えてゆくのを眺めるといふスタンスである。いまもつともリアルなものもやがて消えゆくことに、眼を止めているのである。時はここでは、こころのとときめきやざわめきを洗い流すだけでなく、そもそも時を駆るその動因ともいえるべき欲望そのものをも萎えさせてゆく。先の女子高校生のつぶやきには、いずれ消えゆくものを消してなるものかという、時間に対する^⑥ツウセツなまでの抗いが無い。「忘れていいことと、忘れたらあかんことと、それから忘れなあかんこと」(注2)河瀬直美)を無理やりにでも仕分けるほかないという悲しみもない。ここでは時は、駆るもの、整えるべきものとしてでなく、消えゆくものとしてある。

時間はわたしたち人間の(内的な脆弱さ)の徴だといった人がいるが、こういうことなのかとおもった。ちなみに(注3)マックス・ピカートも、第二次世界大戦が終結してしばらくのことだったか、ニュース放送があつてすぐにそのあとベートーヴェンの音楽が流れ、つづく^⑥ロウドク^⑥の時間の後に天気予報があるといったラジオ番組の編成に「内的連関の喪失」を見てとり、それをなんの抵抗もなく受け容れている同時代人の内面の崩壊を人間の「アトム化」と呼んだのだった。「原子」はかれにあつて(分裂)の徴だったのである。

(注1) 村上龍 —— 日本の小説家、映画監督、脚本家(一九五二年〜)。

(注2) 河瀬直美 —— 日本の映画監督(一九六九年〜)。

(注3) マックス・ピカート —— スイスの医師、著述家(一八八八年〜一九六三年)。

問一 傍線部①～⑥の漢字はひらがなに、カタカナは漢字に直して記しなさい。

問二 次のア～オの「時」に関する慣用句について、空欄に最適な言葉を漢字で記しなさい。

ア	光陰	【	】	のごとし	
ウ	【	】	の上にも三年		
エ	【	】	は寝て待て		
オ	早起きは	【	】	の得	
			【	】	は人を待たず

問三 傍線部X「いわば」を使って短文を作りなさい。

問四 傍線部A「心が既にツルンとしているのに自分で気付いた」とあるが、具体的にどういうことか。40字程度で説明しなさい。

問五 傍線部B「時を未来から現在へと流れ来るものとしてではなく、現在から過去へと流れ去るものとして受けとめる感覚である」に関する次の2つの問いに答えなさい。

(一) 「時を未来から現在へと流れ来るもの」として「受けとめる感覚」は、わたしたちのどのような生き方に関連するものか。【】に最適な41字の部分を本文中から抜き出し、その最初と最後の5字を記しなさい(句読点等も字数に含む)。

【】という生き方。

(二) 「時」を「現在から過去へと流れ去るものとして受けとめる感覚」では、「時」はどのようなものとしてあるか。40字程度で説明しなさい。

問六 あなたにとって「忘れてはいけない」思い出とはどのようなものか。その理由を含めて自由に記しなさい。